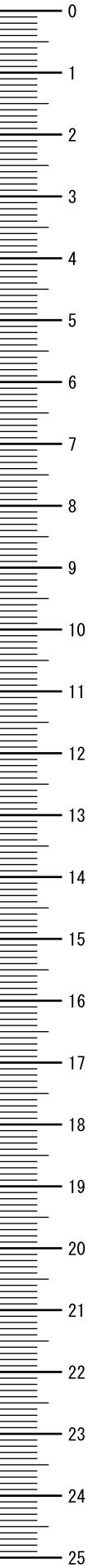
F I E L D N O T E

南種子町の文化財

CULTURAL PROPERTY OF MINAMITANE

南種子町教育委員会
南種子町文化財保護審議会

写真：国選択文化財　西之本国寺盆踊


0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25

発刊にあたって

この本に収録されている文化財は、南種子町の長い歴史の中で育まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な財産です。

本書は、そうした文化財を学び、次世代に伝えることを目的に昭和57年に創刊し、改訂を重ねてまいりました。

この度、西之本国寺盆踊が国選択文化財となるなど、前書の刊行より、国指定1件、国選択1件、県指定4件、町指定1件の合計7件が新指定されたことを受け、改訂版を刊行することとなりました。

近年、文化財は、地域おこしにも積極的に活用されるようになっています。そうした新たな活用に応えるために、本書は、それぞれの文化財を地区ごとにまとめ、所在地を示す詳細な地図を載せ、分かりやすく写真で示すことを心がけています。また、それぞれの文化財の所在地や入口などに写真入りの看板や誘導標識を立てることで、現地を訪れて学びやすい工夫を始めているところです。ぜひ、それぞれの文化財に足を運んでいただければと思っています。

本書が、南種子町の豊かな歴史・文化を感じていただくとともに、文化財をまちづくりに活かす糸口になることを願っております。

最後に、今回の改訂にあたりご尽力いただきました町文化財保護審議会委員の皆様に心より感謝申し上げます。

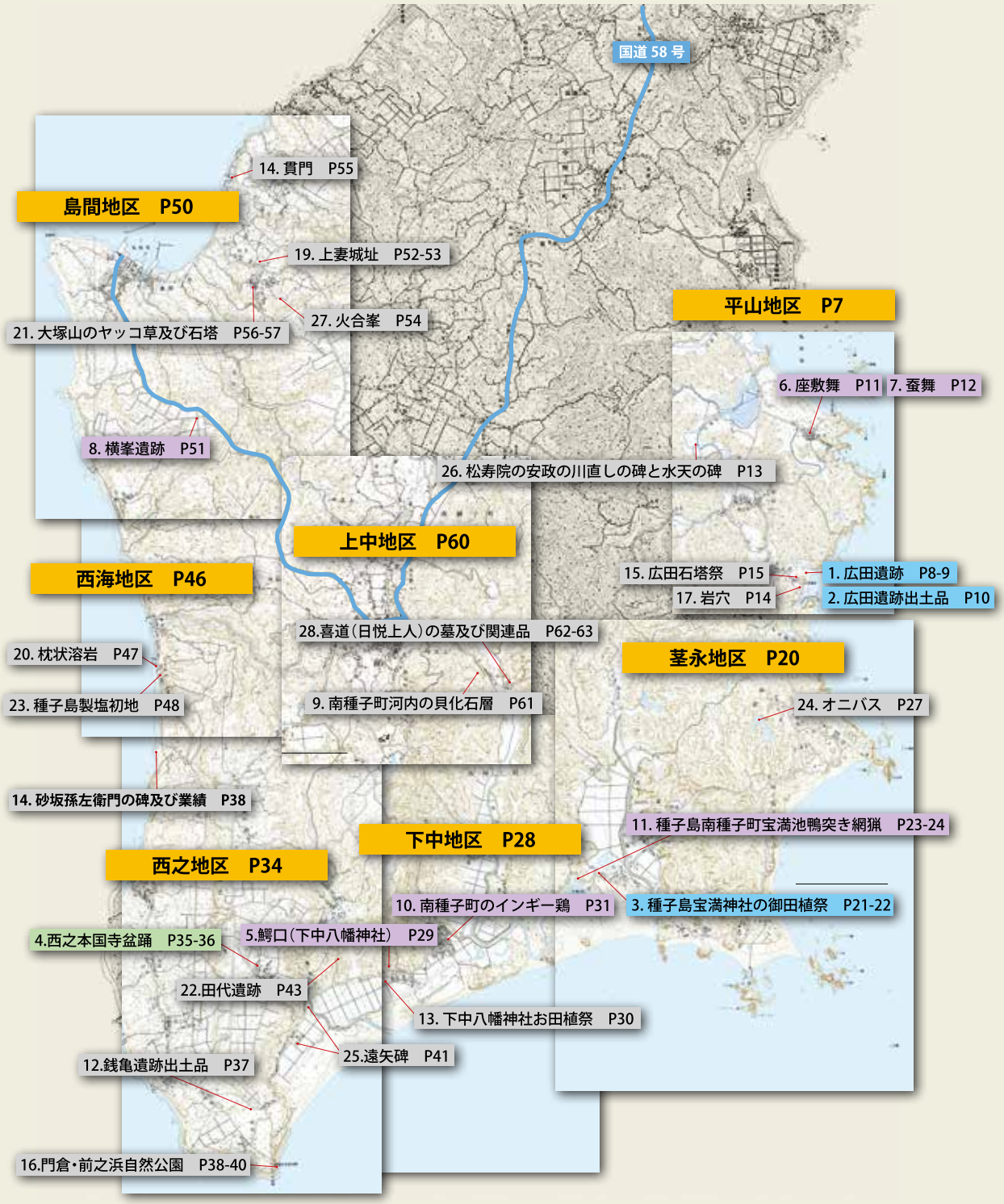
平成30年3月

南種子町教育委員会
教育長　遠藤　修

南種子町内　指定文化財一覧

番号	種　別	名　　称	所　在　地	所 有 者 等	指定年月日	備 考
1	史　　跡	広田遺跡	南種子町平山広田	南種子町	H20.3.28	国指定
2	重要文化財 (考古資料)	広田遺跡出土品	南種子町中之上	南種子町	H21.7.10	国指定
3	無 形 民 俗	種子島宝満神社の御田植祭	南種子町茎永松原	宝満神社 御田植え祭り保存会	H28.3.2	国指定
4	無 形 民 俗	西之本国寺盆踊 (種子島の盆踊)	南種子町西之	西之地区自治公民館	H30.3.9	国選択
5	有形文化財 (考古資料)	鰐　口	南種子町下中真所	下中八幡神社	S42.3.31	県指定
6	無 形 民 俗	南種子町平山の座敷舞	南種子町平山	平山郷土文化保存会	S43.3.29	県指定
7	無 形 民 俗	南種子町平山の蚕舞	南種子町平山	平山郷土文化保存会	S43.3.29	県指定
8	史　　跡	横峯遺跡	南種子町島間横峯	南種子町	H15.4.22	県指定
9	天然記念物	南種子町河内の貝化石層	南種子町上中河内	鹿児島県	H23.4.19	県指定
10	天然記念物	南種子町のインギー鶏	南種子町下中真所	南種子町インギー鶏 育種会	H25.4.23	県指定
11	無 形 民 俗	種子島南種子町宝満池 鴨突き網猟	南種子町	宝満池鴨突き網猟 保存会	H26.4.22	県指定
12	有形文化財 (考古資料)	銭亀遺跡出土品	南種子町中之上	南種子町	H27.4.17	県指定
13	無 形 民 俗	下中八幡神社お田植祭	南種子町下中真所	下中八幡神社 お田植え祭り保存会	S47.3.30	町指定
14	史　　跡	貫　門	南種子町島間稲子泊	鮫島　トク	S47.3.30	町指定
15	無 形 民 俗	広田石塔祭	南種子町平山広田	広田自治公民館	S47.3.30	町指定
16	名　　勝	門倉・前之浜自然公園	南種子町西之～茎永	南種子町	S47.3.30	町指定
17	史　　跡	岩　穴	南種子町平山広田	広田自治公民館	S47.3.30	町指定
18	史　　跡	砂坂孫左衛門の碑及び業績	南種子町西之字大中峰	南種子町	S55.4.9	町指定
19	史　　跡	上妻城址	南種子町島間字内城	河東時成	S56.1.1	町指定
20	天然記念物	枕状溶岩	南種子町西海上立石	南種子町	S56.1.1	町指定
21	天然記念物 史　　跡	大塚山のヤッコ草及び石塔	南種子町島間字大久保	大久保自治公民館	S56.1.1	町指定
22	天然記念物	田代化石	南種子町西之田代	南種子町	S56.4.11	町指定
23	史　　跡	種子島製塩初地	南種子町西海下立石	下立石自治公民館	H3.5.1	町指定
24	天然記念物	オニバス	南種子町茎永	種子島宇宙センター	H7.9.28	町指定
25	有形文化財 (歴史資料)	遠矢碑	南種子町西之本村	本村自治公民館	H20.4.28	町指定
26	有形文化財 (歴史資料)	松寿院の安政の川直しの碑 と水天之碑	南種子町平山川崎塩入	平山地区自治公民館	H20.4.28	町指定
27	名　　勝	火合峰	南種子町島間	大久保自治公民館	H22.3.8	町指定
28	有形文化財 (歴史資料)	喜道（日悦上人）の墓及び 関連品	南種子町中之上	上中地区自治公民館 南種子町郷土館	H28.2.25	町指定

南種子町文化財位置図


国道 58 号
島間地区　P50
14. 貫門　P55
19. 上妻城址　P52-53
27. 火合峯　P54
21. 大塚山のヤッコ草及び石塔　P56-57
8. 横峯遺跡　P51
平山地区　P7
6. 座敷舞　P11
7. 蚕舞　P12
26. 松寿院の安政の川直しの碑と水天の碑　P13
上中地区　P60
西海地区　P46
15. 広田石塔祭　P15
1. 広田遺跡　P8-9
17. 岩穴　P14
2. 広田遺跡出土品　P10
28.喜道（日悦上人）の墓及び関連品　P62-63
20. 枕状溶岩　P47
茎永地区　P20
23. 種子島製塩初地　P48
9. 南種子町河内の貝化石層　P61
24. オニバス　P27
14. 砂坂孫左衛門の碑及び業績　P38
11. 種子島南種子町宝満池鴨突き網猟　P23-24
下中地区　P28
西之地区　P34
10. 南種子町のインギー鶏　P31
3. 種子島宝満神社の御田植祭　P21-22
4.西之本国寺盆踊　P35-36
5.鰐口（下中八幡神社）　P29
22.田代遺跡　P43
13. 下中八幡神社お田植祭　P30
25.遠矢碑　P41
12.銭亀遺跡出土品　P37
16.門倉・前之浜自然公園　P38-40

南種子町の
文化財

CULTURAL PROPERTY OF MINAMITANE

南種子町教育委員会
南種子町文化財保護審議会

もくじ

発刊にあたって…… 1
南種子町内指定文化財一覧・位置図……2-3
南種子町の歴史……5-6
■平山地区…… 7
広田遺跡……8-9
広田遺跡出土品…… 10
座敷舞…… 11
蚕舞…… 12
松寿院の安政の川直しの碑と水天の碑 13
岩穴…… 14
広田石塔祭…… 15
吉助橋…… 16
菊池竹庵の墓…… 17
大浦塩田跡…… 18
特務艦「志自岐」遭難記念碑…… 19
■茎永地区…… 20
種子島宝満神社の御田植祭…… 21-22
種子島南種子町宝満池鴨突き網猟 23-24
宝満の池…… 25
馬耕記念碑…… 26
オニバス…… 27
■下中地区…… 28
鰐口…… 29
下中八幡神社お田植祭…… 30
南種子町のインギー鶏…… 31
一陣長崎鼻貝塚遺跡…… 32
コラム：タカクマムラサキ …… 33
■西之地区…… 34
西之本国寺盆踊…… 35-36
銭亀遺跡出土品…… 37
門倉・前之浜自然公園…… 38-40
遠矢射碑・遠矢落碑…… 41
砂坂孫左衛門の碑及び業績…… 42
田代化石…… 43
浜の山の石塚…… 44
砂糖製造師「前窪」氏の墓…… 45
■西海地区…… 46
枕状溶岩…… 47
種子島製塩初地…… 48
コラム：西海地域の浜エビス …… 49
■島間地区…… 50
横峯遺跡…… 51
上妻城址…… 52-53
火合峯…… 54
貫門…… 55
大塚山のヤッコ草及び石塔…… 56-57
島間港・「伊能忠敬」種子島測量上陸の地 58
コラム：南種子町の遺跡 …… 59
■上中地区…… 60
南種子町河内の貝化石層…… 61
喜道（日悦上人）の墓及び関連品 62-63
元御料馬「白波号」碑…… 64
あとがき…… 65

南種子町の歴史

南種子町では、島間横峯地区で３万年以上前の旧石器時代の礫群が、島間小平山地区では縄文時代後期の環状列石が発見されるなど、先史時代の貴重な遺跡の発掘が相次ぎ、全国的な注目をうけています。

また、弥生時代後期から古墳時代にかけての墓地遺跡である広田遺跡は、昭和30年代と平成17、18年に発掘調査が行われ、平成20年に国史跡に指定されました。なお、この遺跡から出土した貝製品は、平成21年に国の重要文化財に指定されています。

こうした発掘調査によって、先史時代の種子島には豊かな文化が花ひらいていたことがわかってきました。

奈良時代になって、多禰（たね）・掖玖（やく）島は大和朝廷に編入され、多禰国（702年頃）となり国司が派遣され、郡制や条里制が導入されました。その名残として条里を示す「市之坪」などの字名が残っています。

郡制は、益救（やく）郡、熊満（のま）郡、熊毛郡に分かれて行われ、熊毛郡は今の南種子町と推定されています。なお、熊毛郡 (南種子町) に国府が置かれて、種子島・屋久島の中心であったとする学説があります。

また、その三郡には、それぞれ、高野入道、野間入道、熊毛入道が郡司として任じられ、治めたとされています。

鎌倉時代になると、種子島に代官として赴任した肥後氏（種子島氏）が在地領主化し、赤尾木に拠点を構え、島内の支配権を確立していきます。

戦国時代には、天文12年（1543）8月に、門倉岬に異国船が漂着し、鉄砲伝来の地となりました。

鉄砲の伝来は、日本における戦争のあり方を大きく変え、織田信長・豊臣秀吉による日本統一の原動力となりました。

中世の終わりごろから江戸時代にかけて、種子島でも庶民文化が花ひらき、今に伝承されている多彩な郷土芸能が生まれました。

明治維新後は、明治12年12月、島間村・西之村・坂井村の三村連合役場が島間におかれ、民選戸長として日高亮助氏が、また平山村・茎永村・中之村の三村連合役場が茎永におかれ、戸長に日高長蔵氏が選任されました。また、それぞれ用掛として数名の事務員をおき、村政が行われました。

明治 16 年 11 月、島間村・西之村が茎永村役場の管轄となり、官選戸長は鹿児島本土出身の田中十太郎氏となりました。

明治 22 年 4 月、町村制の実施により、種子島は熊毛郡となり、西之表に郡役所がおかれ、北種子村・中種子村・南種子村が誕生しました。南種子村は元の下之郡の 5 村（平山村・茎永村・西之村・中之村・島間村）を一村に編成したもので、役場を茎永において初代村長に日高亮助氏が就任しました。その後、役場の位置が東に片寄っていることから、大正 12 年 5 月、新任郡長であった鳥飼秀文氏の採決により、役場を現在の上中に移転しました。

昭和 31 年 10 月、鮫島二男丸村長によって町制が施行されました。

昭和 41 年 5 月、科学技術庁宇宙開発推進本部によって、南種子町にロケット発射場建設が決定され、茎永の竹崎に小型ロケット打ち上げ射点や固体ロケット地上燃焼試験を行う竹崎射場が建設されました。この射場からは、昭和 43 年以降、小型ロケット 84 機が打ち上げられました。

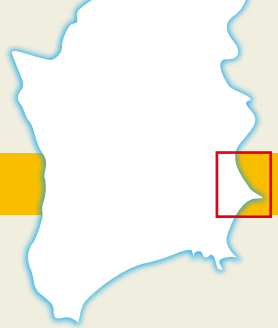
昭和 44 年 10 月に、宇宙開発推進本部が宇宙開発事業団となり、昭和 45 年からは大型ロケット打ち上げ用の大崎射場の建設が始まりました。これに伴い昭和 46 年、大崎集落全世帯（13 世帯 46 人）が移転しました。

完成した大崎射場からは、Ｎ－Ｉロケット並びにＨ－Ｉロケットによって、技術試験衛星や気象・通信・放送などの実用衛星が打ち上げられました。

その後、Ｈ－Ｉロケットに次ぐ世代の主力ロケット打ち上げ用として、吉信射点が完成し、この射点からは、平成 6 年 2 月、2 トン級の衛星をのせたＨ－Ⅱロケットが打ち上げられました。さらに、平成 13 年 8 月にはＨ－ⅡＡロケットが打ち上げられました。

その後、平成 15 年 10 月に、独立行政法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）として再スタートしました。平成 21 年 9 月には新たな主力ロケットＨ－ⅡＢが打ち上げられ、ロケット基地としての整備・拡充がすすめられています。

南種子町は、鉄砲伝来などの日本の歴史上重要な舞台となった豊かな歴史の町であるとともに、日本の最先端技術、ロケット基地の町として未来をみつめる町でもあるのです。



平山 地区

吉助橋
町選定文化財 P16

大浦塩田跡
町選定文化財 P18

座敷舞・蚕舞
県指定文化財 P11-12

松寿院の安政の川直しの碑と水天之碑
町指定文化財 P13

菊池竹庵の墓
町選定文化財 P17

広田石塔祭
町指定文化財 P15

広田遺跡
広田遺跡出土品
国指定文化財 P8-10

岩穴
町指定文化財 P14

特務艦志自岐遭難記念碑
町選定文化財 P19

広田遺跡（ひろたいせき）

分類：史跡

国指定文化財：平成 20 年 3 月 28 日指定

広田遺跡は、種子島の南部、太平洋に面した全長約 100 mの海岸砂丘上につくられた集団墓地です。

弥生時代後期から古墳時代併行期の種子島では、日本本土と異なり、古墳や墳丘墓などはつくらず、海岸の砂丘に墓地をつくったのです。

この遺跡の調査は、昭和 32 年から 34 年にかけて国分直一・盛園尚孝氏らによって行われ、合葬を含む 90 ヵ所の埋葬遺構から 157 体の人骨が出土しました。

埋葬された人骨を調べた結果、広田人は、身長が成人男性で平均約 154㎝、女性で平均約 143㎝しかなく、同じ頃の北部九州の弥生人（成人男性で平均約 163㎝、女性で平均約 152㎝）と比べても、極めて身長が低い人々であることがわかりました。また、上顎の側切歯を 1 本だけ抜歯したり、後頭部を扁平（いわゆる絶壁頭）にしたりする特異な習俗をもつことがわかりました。

これらの人骨は、奄美・沖縄諸島でとれる貝を素材とした貝輪や玉、幾何学文が彫刻された貝符や、竜佩形貝垂飾など総数 44,242 点にも及ぶ豊富で多彩な貝製の装身具を身につけていました。このような習俗・貝の装飾文化は、日本列島でこれまで他に例がありません。

広田遺跡航空写真　　手前にあるのが広田遺跡、奥にロケット発射場が見える

平成 17、18 年には、南種子町教育委員会による発掘調査が行われました。その結果、昭和 30 年代の調査で砂丘の南端でみつかった墓地（南側墓群）の範囲がさらに西側に拡大することと、広田川に面した砂丘北端にも同時期の墓地（北側墓群）が存在することが新たにわかり、遺跡の範囲が拡大することがわかりました。

この調査では、南側墓群で 11 基、北側墓群で 9 基の埋葬遺構を確認し、2,966 点の貝製の装身具と 92 点の土器、28 点のガラス小玉、15 点の石器が出土しています。

平成 20 年 3 月 28 日には、「列島の弥生、古墳時代社会と南島社会の接点における社会・生活のあり方を知るだけでなく、わが国の文化形成の多様性を知るうえで重要な遺跡である。」ことから、種子島で初めての国史跡指定を受けました。

北区 1 号人骨

発掘調査状況　　平成 17 年調査南区 1 トレンチ（西から撮影）

広田遺跡出土品（ひろたいせきしゅつどひん）

分類：重要文化財（考古資料）
国重要文化財：平成 21 年 7 月 10 日指定

広田遺跡出土品は、考古資料としては種子島で初めての国の重要文化財で、鹿児島県全体でも考古資料の重要文化財は、「広田遺跡出土品」と「上野原遺跡出土品」のわずか２点だけです。

広田遺跡出土品は、弥生時代後期後半から古墳時代にかけて、河口の砂丘上につくられた集団墓地から出土したもので、多彩な貝製品、ガラス玉、石鏃などで構成されています。主なものとして、南海産の貝を素材とし精緻（せいち）な彫刻文で飾られた貝符や、豊富な貝輪、貝匙、貝垂飾などがあります。

このように、多量の貝製品を墓に副葬する文化は、わが国においては他に例がありません。日本列島の当時の文化と、種子島を含む南島文化との比較研究を行ううえで、極めて重要な資料です。

国重要文化財　広田遺跡出土品（南種子町所蔵）

座敷舞（ざしきまー）

分類：無形民俗文化財

県指定文化財：昭和 **43** 年 **3** 月 **29** 日指定

座敷舞は、宴の余興で踊られる舞です。「ミイサイナ　ミイサイナ」（見せてほしいという意味）というはやしをうけ、舞手が簡単な扮装をして、歌いながら物まねをするようなしぐさで、ユーモラスに踊る楽しく味わいのある舞です。

舞には、竿の先に鳥餅をつけて鳥を生け捕るしぐさをする鳥刺舞、カニの歩く様子をまねたガニ舞、仏とは何かをおもしろく問答する仏舞などがあります。

座敷舞は、笛や太鼓といった鳴り物がないことや、歌詞に種子島の方言が多くみられることから、中世の頃、中央から伝わった芸能が元となり、この島でつくられた踊りではないかといわれています。また「種子島家年中行事」に、江戸時代には西之表の西町では「大黒舞」を、東町では「恵比寿舞」を伝承していたという記録が残っています。

現在、座敷舞が伝承されているのは、平山と島間だけです。「鳥刺舞」は全国的に見られますが、「ガニ舞」「婆ジョウ舞」「バックー舞（伝承者　柳田拓男氏）」などは南種子にしか伝承されていないとても貴重な舞です。そのため、昭和 56 年に文化財保存活用事業を行い後継者の育成に努め、平成 7 年には「種子島南種子の座敷舞」として記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財として国により選択され、その伝承に努めています。

平山に伝承されている「鳥刺舞」（伝承者　平山郷土文化保存会　中畠一三氏）

かーごまー
蚕　舞

分類：無形民俗文化財
県指定文化財：昭和 **43** 年 **3** 月 **29** 日指定

蚕舞は、1月14日から15日にかけて、白頭巾に白足袋、着物姿で女装した二才（青年男子）を中心に、地域の青年や子供たちで構成される一団が、各家を訪問して祝う小正月行事です。まず玄関に並び、太鼓と鉦に合わせて歌をうたいます。そして、ヨメジョウ（女装した舞手で蚕の神様を表現）が座敷にあがり、舞い、さらに座敷の隅にさしてあるゴーサシ（柳の枝に餅をさしてマユや稲穂に似せたもの）を担い優雅に舞います。そのそばでゲーマー（芸回）と呼ばれる道化役が、面白おかしい仕草をして踊り、ヨメジョウの舞をひきたたせます。舞い終わると、家の主人がゲーマーの徳利に焼酎を入れ、ご祝儀をわたします。舞や歌の形態は、島内各地域で多少の違いがみられます。

もともと蚕舞は、養蚕が盛んになるようにと、島主が奨励して行わせたものといわれていて、そのため歌の内容は蚕の成長過程を詳しく伝えており、当時の重要な養蚕技術を人々にわかりやすく教えるといった目的もあったようです。現在は、家内繁栄や豊年満作を祝う行事として伝承されています。

ヨメジョウとゲーマー

浜田集落の蚕舞

歌　詞

「祝い申すこれから申す　門から申す　この家　家は裕福舞いの家と見かけ申すよ　ましてこの家祝うておじゃるろうから祝い申すよ　九十九階の蚕の宮城を廻しますさきは　綾をはえ錦をひろめ　ヤーララランラととくとふませて　これより東の朝ひら峠のケンケン鳥のメンドリの右のおぼり羽根　左の風切り
おっとり合わせて　一羽根がいですくえば千枚すくう　二羽根がいですくえば二千枚すくう
三千枚の蚕種をよせよ集めよ
アリ児になるときゃ　アイライライと申す　ツブレになるときゃ　ツルツルと申す　フシ児になるときゃ　ハジの舞いを召す　長雨になるときゃ雨桑もきらわず　露桑もきらわず　赤まゆ白まゆかがせ給うれ　そのまゆの固さは天河原の石よりも固うござる
どの駒か春駒の勇む如くに　夢に見てさやものゆきものよ
母女さまかよ娘女かよ　町のお祝いお通りやれ」

松寿院の安政の川直しの碑と水天之碑

しょうじゅいん　あんせい　かわなお　ひ　すいてんのひ

分類：有形文化財（歴史資料）
町指定文化財：平成 20 年 4 月 28 日指定

松寿院の安政の川直しの碑は、種子島家第 23 代久道の夫人松寿院の業績をたたえ、平山の人々が、万延 2 年（1861）に大浦川の旧河道と新河道の分岐する土手の上に建てたものです。

松寿院は天璋院篤姫の伯母にあたり、種子島の塩不足を憂いその解決のため、安政 3 年（1856）に平山大浦に塩田を開拓した人物です。

当時、平山から熊野へ行く道は大浦川の潮が満ちると、人も馬も通行することは困難でした。

また、満潮時になると海から潮が入り農作物も甚大な塩害を受けていました。松寿院は、この潮による害の原因が、大浦川が蛇行しているからだと考えて、川幅を 10 mに広げ、長さ 200 mにわたるまっすぐな川を新たに作る工事を行いました。

この工事では、川を掘りあげながら土手を築いたので、その土手は新しい道路となり人馬の往来も便利になったといいます。この蛇行していた昔の川を古川といい、今のまっすぐな川を安政川あるいは新川といいます。また、この堤は安政土手と名づけられました。この工事によって、満潮時の洪水の害を防ぐことができるようになり、潮入りで荒れ田であったものが、立派な美田となりました。

この川直しの大事業は、安政 4 年（1857）正月から始まり、春の農繁期はしばらく休み、6 月に再開して 10 月はじめに完成しました。従事した人夫は延べ 1 万 6485 人、かかった費用は 285 両（松寿院のお手元金）でした。

その年の 12 月、川直しの大工事が無事完成し願いがかなえられたことに感謝して、松寿院は、祠をつくり宝光権現と名づけ祀りました。また翌年の安政 5 年（1858）2 月には、水天之碑を建立しています。

松寿院の安政の川直しの碑と水天の碑

岩穴（いわな）

分類：史跡

町指定文化財：昭和 47 年 3 月 30 日指定

岩穴は、種子島に古くから伝わる乾燥浴、岩穴焚きが行われた場所で、南方起源の風習だといわれています。

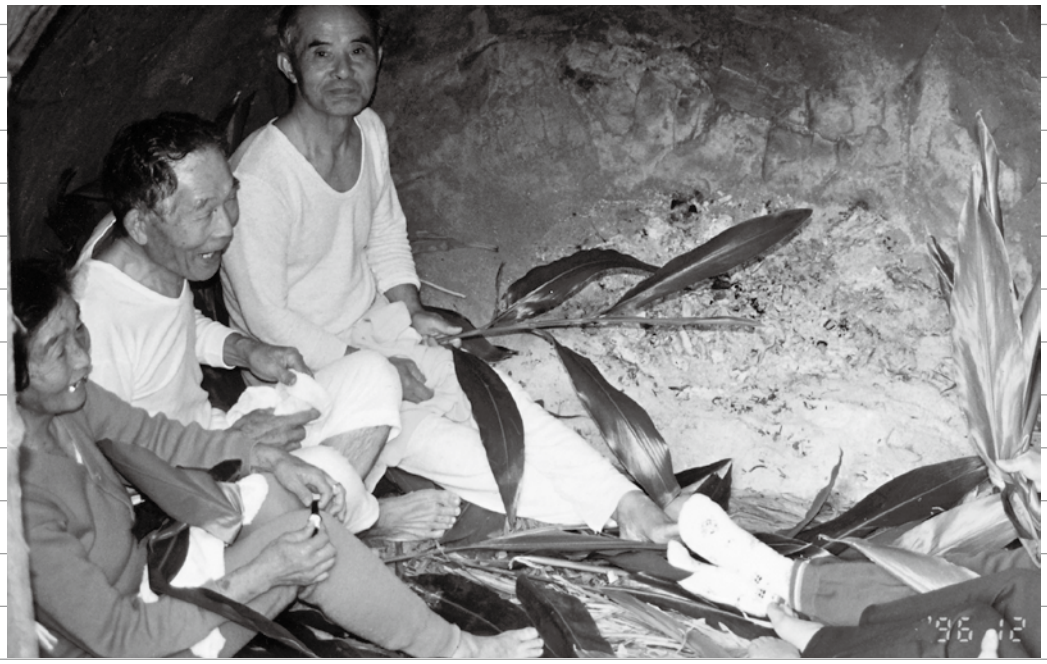
岩穴焚きは、いまでいうところのサウナ風呂のようなもので、農閑期に行われ、瀬風呂焚き同様、古くから民間入浴療法として親しまれてきました。10 日～ 15 日の療養期間で、ヒエヒキ（破傷風）・神経痛・リュウマチ等に効果があったといわれています。また、何より集落民の大切なコミュニケーションの場でもありました。

岩穴焚きの方法は、まず中で火を焚き岩穴の中全体を暖めます。次に穴の中央に残り火を集め、その周囲に小枝や柴、ゲットウの葉、バショウの葉等を敷きつめ、入浴者はその上に座ります。最後に藁で作った蓋で入り口を密閉し、発汗を促すのです。

昔は町内各集落にそれぞれ岩穴があり、今でも、田代神社境内などに残っています。

広田集落では、この貴重な伝統文化を守るため、西銘吉十郎氏らが中心となって、昭和 48 年 4 月に岩穴を修理し、岩穴焚きを復活させました。近年では、平成 8 年に岩穴焚きを行っています。

岩穴入口



平成 18 年に行われた広田集落の岩穴焚き

ひろたせきとうまつり
広田石塔祭

分類：無形民俗文化財
町指定文化財：昭和 47 年 3 月 30 日指定

広田遺跡公園から北へ約 100 mの地点にある小高い丘が、広田集落の石塔祭の祭場です。石塔祭は、共同の祖先の霊を祭った石塔の前に集落民が集まって精霊様を供養し送るお盆の行事で、広田集落では毎年 8 月 15 日に行われています。

祭場の中央にあるオコーソ（御高祖）と呼ばれる五輪塔の前に大棚を組み、祭場の周りに 9 つある小石塔の前に一族ごとの小棚を組みます。各家から小籠にバショウやエンガ（ホウセンカ）の葉や花びらなどを刻んだもの、マキ（ハナミョウガの葉に米の粉を包み蒸して作った団子）、線香などを入れ、棚にお供えします。そして僧侶が読経をする中、それぞれ祖先の霊に参拝して祭は終了します。

最後に、お供えしたマキを必ず一本ずつ食べて帰るしきたりになっていて、これを食べると 1 年間健康であるといわれています。

町内のほとんどの集落に石塔はありますが、祭が昔のまま継承されているところは広田集落以外にはありません。

この石塔祭は共同体による祖霊祭で、古い形式を伝承していて、仏教伝来以前の祭礼の姿を反映していると考えられています。

石塔祭

小石塔（小棚に供えられたマキ）

きちすけばし 吉助橋

分類：史跡
町選定文化財

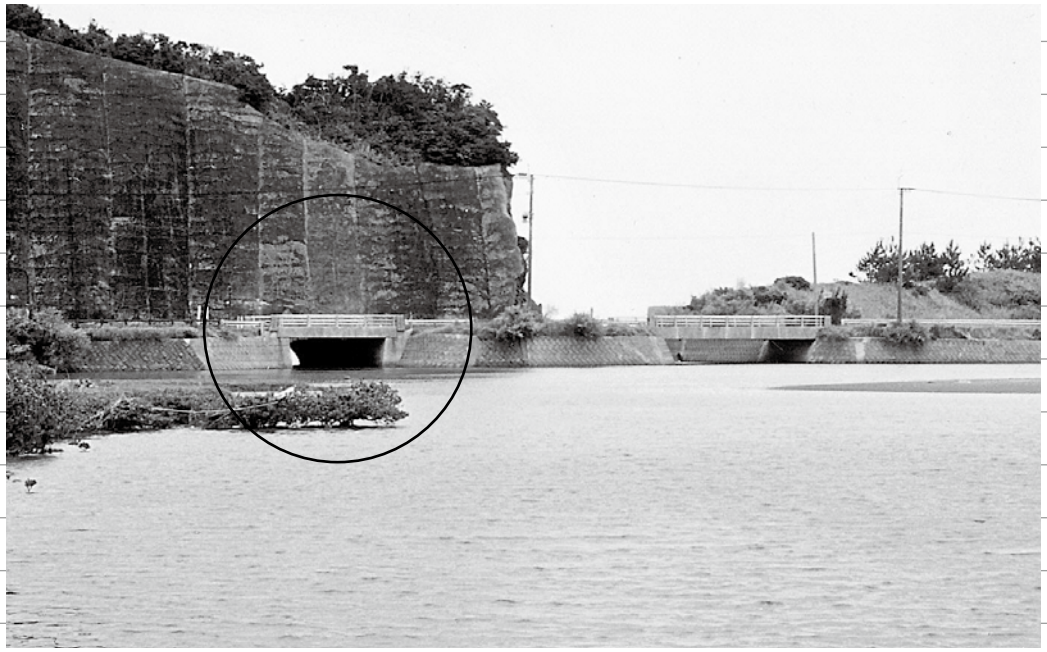
吉助橋は、平山から熊野に通じる県道の大浦トンネルの所にかかっていました。橋の横には、昭和42年1月に平山の人々により、坂口吉助翁顕彰碑が建てられています。

碑文によると、昔、平山と熊野の間を流れる大浦川には橋がなく、満潮になると人馬の往来ができなかったそうです。そんな中、日露戦争が始まり、熊野神社に出征兵士の武運長久を祈る参拝者が増えたため、その不便さは目に余り、以前からここに橋をかけたいとの志があった吉助翁は、次男の出征を機に決意し工事を始めました。そして明治37年9月、一人で木製の橋を完成させました。

吉助翁は昭和4年、86才で亡くなりましたが、その業績は後世に語りつがれ、いつしかこの橋を吉助橋と呼ぶようになりました。

のちにコンクリートの橋に架け替えられ、大浦橋と名づけられましたが、吉助翁の功績を忘れてはならないという平山の人々の思いにより、吉助橋と改称されたといわれています。

坂口吉助翁顕彰碑


現在の吉助橋

菊池竹庵の墓（きくちちくあんのはか）

分類：有形文化財
町選定文化財

菊池竹庵は、文政 12 年（1829）平山瑞堯（ずいぎょう）に生まれました。竹庵という名は僧名です。彼は、5 歳の時に西之表の慈遠寺の小僧となり、その才能が認められ、10 歳から鹿児島の正建寺（種子島家菩提寺）で修行しました。

19 歳の時、青雲の志を抱き上洛し、一時大阪で医術を修めましたが、再び仏門に戻り伊賀の法華寺に身を置き、尊王派の志士と交際を深め、尊王攘夷を志し奔走しました。また、江戸滞在中に武芸にも取り組みました。その後、京都本能寺本法院（塔中）の執事となりました。彼は、尊王派の志士と交流があったことから、一時、新撰組に捕縛されました。釈放後は、本能寺の末寺・東漸寺の役僧となっています。

大政奉還後、天皇を中心とする明治新政府が樹立しましたが、不満をもつ旧幕府方と明治元年（1868）に戦が始まりました（戊辰戦争）。新政府軍は江戸城にいる旧幕府方を攻めるために東征し、竹庵は自ら進んでその道案内と敵の様子を探る役を申し出ました。進軍の途中、上総国（千葉県）の五井に旧幕府方の軍勢が待機しているとの情報が入ったので、その敵情を探るため果敢にも夜間に忍び込みましたが、敵に見つかり殺害されてしまいました。

竹庵の遺体は、上総の八幡駅の円頓寺に仮埋葬され、明治 3 年 3 月 22 日、東京の大円寺に改葬されました。碑文の中に緇徒（しと）（僧侶の意味）の身をもって義にたおると記されています。その後、故郷の平山神社境内にも墓が建てられました。竹庵の忠義に対し、明治天皇から父親に報奨金が贈られ、士族としての身分も与えられています。

菊池竹庵の墓（平山神社境内）

おおうらえんでんあと
大浦塩田跡

分類：史跡
町選定文化財

大浦塩田跡は、浜田集落入口の西側、大浦川の河口に広がる湿地帯にあり、種子島で初めて塩田式の製塩が始められたところです。それまでは、浜で海水を焚いて塩を取る方法でしたが、量がたくさん取れないため塩が不足し、何百石という塩を島外より買い入れていました。松寿院はこの塩不足を憂い、塩田開発に取り組みました。

松寿院が安政３年（1856）冬、市来の商人平川某に調査させたところ、ここが塩田に最適であることがわかり、翌年夏、市来の修験者井上良盛坊を招き堤防を築かせ、製塩を始めました。しかし、塩田が狭く生産量が少なかったので、更に経験の深い塩師二人を雇いました。

網代焚きという製塩法により、これまでの 10 分の 1 の薪で何倍もの塩を生産することができましたが、松寿院は満足せず、今度は出水から塩師二人を招き、大拡張工事に着手しました。大変な工事で、文久元年（1861）冬にやっと完成しました。

このとき導入した製塩法である防州伝の本釜焚きは、網代焚きよりも数倍多く塩ができ、年間千石（約 180.9㎥）も生産したので、島内はもとより屋久島にも売り出しました。その後、明治 27 年に塩田拡張のため大規模な埋め立て工事が行われましたが、資金に困り、土地を売り渡してしまいました。しかしその後、平山の有志 22 名が土地を買取り、さらに官有地の払い下げも受けて、昭和９年、1 区画 1 反 8 畝（18ha）の広さの区画を 23 作り、動力ポンプを取り付けた近代的な大塩田を完成させました。塩田で濃縮した海水を 4 個の釜で焚き、一日に 200 俵以上の塩が取れ、将来も大いに期待されましたが、終戦後昭和 27 ～ 28 年頃になると塩の輸入が盛んになり、また値段も下がり採算が取れなくなったため中止されました。これにより、種子島における製塩の歴史に幕が降ろされたのです。

塩田跡

昭和９年に作られた沼井（海水を凝縮させたところ）

特務艦「志自岐」遭難記念碑（とくむかん しじき そうなんきねんひ）

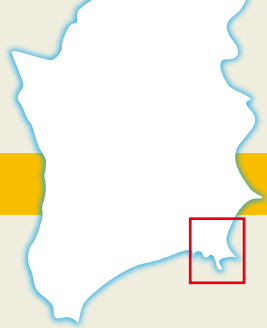
分類：有形文化財
町選定文化財定

記念碑は、大正８年８月におきた遭難事故の悲惨さを伝え、沈没した志自岐乗組員の御霊を弔うため、平山の人々により大正 10 年９月１日に建立されました。

大正８年８月４日、重油を満載してボルネオのタラカンを出港し、佐世保に向かっていた志自岐は、台湾沖から台風に巻き込まれました。難航を続け、ようやく種子島沖にさしかかりましたが、８月 15 日、竹崎の南の海に広がる鍋割りと源三郎の暗礁に座礁し、沈没してしまいました。志自岐は総トン数 5,300 トンで、艦長は海軍中佐石川庄一郎でした。

遭難の知らせをうけた平山の人々は、総出で昼夜を問わず懸命の捜索を続けましたが、その甲斐もなく、乗組員 120 人中、生存者はわずか７人、そして 15 人の遺体を収容しただけでした。当時は通信が不便だったため、佐世保鎮守府に何度も打電しましたが、戦艦肥前を始めとした救援隊が到着したのは３日後のことでした。こうした平山の人々の救助並びに遺体の収容等の労に対して、帝国軍人会から褒賞が贈られています。

特務艦「志自岐」遭難記念碑（広田遺跡公園内）



茎永 地区

オニバス
町指定文化財 P27
種子島南種子町
宝満池鴨突き網猟
県指定文化財 P23-24
馬耕記念碑
町選定文化財 P26
宝満の池
町選定文化財 P25
種子島宝満神社の
御田植祭
国指定文化財 P21-22

種子島宝満神社の御田植祭（たねがしまほうまんじんじゃ　おたうえまつり）

分類：無形民俗文化財

国指定文化財：平成 28 年 3 月 2 日指定

松原集落にある宝満神社では、毎年４月３日頃、その年の豊作を祈願して、赤米のお田植え祭りが古式豊かに行われています。宝満神社は玉依姫（たまよりひめ）を祀る神社で、この神が海宮から五穀の種子を持参して、種子島に蒔いたと伝えられています。古代米とされる赤米はオイネと呼ばれ、お田植え祭りでは古くから舟型をした神田に植える習わしとなっています。また、お田はマエノ田とイナニワに分かれており、マエノ田は苗代田として使用し、お田植えはイナニワで行うようになっています。

祭の前日、宮座の人々は、お田の森の入口、お田、拝殿等に氏子から奉納された旗を立てます。そして当日の早朝、社人（しゃにん）と祝殿（ほいどん）によって祭場となるお田の森の神木の根元に、米・塩・大豆・酒・二束のオイネが供えられ、神事の準備が行われます。そして、いよいよお田植え祭りの始まりです。

お田植舞の奉納（舟田での社人夫妻による舞い）

赤米お田植え祭事は、次の通り行われます。

1．お田植え祭りの場所　　茎永字稲庭（いなにわ）お畦（せまち）
2．お田植え祭りの時期　　現在４月３日頃（縁起によれば旧暦の４月）
3．お田植え奉仕者　　社人・神職（祝殿）・氏子総代・公民館長・青年等
4．お田植え祭り次第
（イ）お田の森の神事　降神の儀・お苗授けの儀・昇神の儀
（ロ）お畦でのお田植え　氏子総代が、お畦に赤米のお苗を植えます。お田植えは、太鼓や作り拍子と呼ばれる田植え歌に合わせて、男だけで行われます。
（ハ）お田植え舞の奉納　お田の森前の舟田で、社人夫妻が田植え歌に合わせて優雅に舞います。
（ニ）直会（ナオライ）　お田の森正面のお畑で、お田植え奉仕者全員に赤米を原料にした甘酒と赤米のにぎり飯やツワブキ・竹の子・干し大根等を煮しめたご馳走が振る舞われます。直会には、神様と一緒に会食をするといった意味があるようです。
（ホ）マブリ祭　マブリは全てのお田植えの行事が終わった後、即ち９月10日、社人宅で行われていましたが、現在は直会と一緒に行われています。マブリは、社人が役員や氏子総代たちを慰労するものです。

稲のルーツを探る研究には、二つの大きな方法があるといわれています。

①稲の系統を植物学的に追求する方法。
②稲作に伴う農耕技術や神話、宗教儀礼、社会、経済のあり方を比較し追求する方法。

稲のルーツを考える際に、この両者の方法でクロスチェックできる、宝満神社お田植え祭りと赤米は、貴重な文化遺産であると考えられています。

また、古代米としての赤米が伝統的に栽培されている地域は、全国でも、ここ宝満神社と、長崎県対馬、岡山県総社市の３ヶ所だけです。

赤　米

たねがしまみなみたねちょうほうまんのいけかもつ　あみりょう
種子島南種子町宝満池鴨突き網猟

分類：無形民俗文化財
県指定文化財：平成 **26** 年 **4** 月 **22** 日指定

毎年、冬になるとシベリアから鴨が日本列島に飛来します。その鴨を捕獲する伝統的な猟法である突き網猟は、全国でも数カ所しか伝承されておらず、文化財の指定を受けたものは石川県加賀市大聖寺の片野鴨池の坂網猟法と用具(県指定)、宮崎県宮崎市佐土原町の巨田池の鴨網猟（県指定）と種子島南種子町宝満池鴨突き網猟（県指定）の三ヶ所しかありません。

猟は、三角形（扇形）の突き網を使い行います。鴨は夕方に宝満池から餌場である田んぼに群れで飛び立ち、明け方に池に帰ってきますので、その通り道の樹上から、飛来する鴨に向かって突き網を投げ上げ捕獲するのです。猟期は 11 月 15 日から 2 月 15 日までとなっています。

この猟は、少なくとも江戸時代には行われていたことが種子島家の所有する古文書や宝満神社の縁起書から分かっています。また、宮崎県の巨田池の鴨網猟は種子島から慶長 8 年（1603 年）に伝わったとされていることや、戦国時代の武将である上井覚兼の日記にこの猟のことが記されていることから、種子島でも 400 年以上前の戦国時代には既にこの鴨猟が行われていた可能性があります。

このように、古くから伝承されていて全国的にみても希少な種子島南種子町宝満池鴨突き網猟は、踊りや行事以外では初めての鹿児島県指定無形民俗文化財となりました。

宝満池鴨突き網猟保存会の皆さん

宝満池

網を構えて待つ

鴨猟の瞬間

網にかかった鴨

宝満の池（ほうまんいけ）

分類：名勝

町選定文化財

赤米のお田植え祭りで知られる宝満神社の奥にあり、種子島の名勝地の一つとなっています。周囲が約 1,230 m、深さ 6 m、南北 460 m、東西 334 m、面積 49,308㎡で、種子島で一番大きな淡水池です。池にはコイやフナ、熱帯植物のハスやヒシなどが生息しています。また冬には、数百羽のマガモも渡来します。池の周囲は、宝満神社の神域となっていて、うっそうとした森の中に、ところどころ老木が枯れ果てた姿を見せる、神秘的な雰囲気の場所です。

池の南側には砂丘が迫っており、その砂丘を越えると海となっています。この宝満の池は、茎永層群（約 1,000 万年前にできた地層）の一部が沈降し、入江になった後、海との間を砂丘がせきとめてできた海跡湖だといわれています。

宝満の池

宝満神社

馬耕記念碑（ばこうきねんひ）

分類：有形文化財
町選定文化財

この記念碑は、馬耕の発展に尽力をつくした先生方の功績をたたえ、また馬耕の歴史を後世に伝えるため大正３年３月、茎永の人々により建立されました。

種子島で最初に馬耕が始まったのが茎永です。明治 19 年、熊本から招かれた春木敬太郎氏と三木彦四郎氏の両農業技師の指導によって始められました。馬耕は馬に鋤を引かせ田畑を耕すもので、馬の訓練がとても重要で、馬を自由自在に使いこなせるようになるまでには３ヵ月～半年ほどかかったといいます。

人々の長年の努力により、島内で馬耕は次第に普及し、水稲栽培は大きく改善されました。馬耕導入前は、牛に鋤を引かせる方法（牛耕）で、牛は作業が遅く、時間がかかっていました。牛耕の前は、ホイトウ（放踏）といって、牧に放牧している馬を数頭、水を引いた田んぼに放して踏ませ、やわらかくするといった方法でした。

さて、馬耕が年々盛んになると、その早さや技術（深耕度と低盤の技量）を競う馬耕競犂会（馬耕試験）が毎年開催されるようになりました。第１回開催は明治 38 年、その後昭和 35 年まで、島内３市町でそれぞれ開催されました。特に昭和 18 年頃が最も盛んで、郡・県大会も盛んに行われていたようです。

馬耕記念碑（茎永総合研修センター前）

馬耕風景

オニバス

分類：天然記念物（植物）

町指定文化財：平成 7 年 9 月 28 日指定

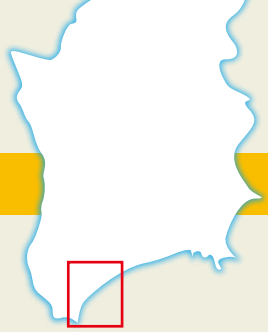
種子島宇宙センター内の水源地に生息しています。学名は Euryale ferox、スイレン科の一年生浮葉水草で、夏頃に薄紫の小さな花を咲かせます。原産地は東南アジアで、その葉や茎に鋭いトゲがあることから鬼蓮（おにばす）の名がついたといわれています。

本州、四国、九州の湖沼や河川に生息していましたが、環境の悪化や埋め立てなどで自生地は急速に減少し、環境省レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。

現在、南種子町が日本の南限となっています。町内ではほかに大浦川の古川でも生息しています。過去には宝満の池でも確認されていたようです。

水源地には毎年数百羽のマガモが越冬しており、その越冬時期とオニバスの結実時期がほぼ同じであることから、マガモがオニバスの種子を運んできた可能性が指摘されています。

オニバス



下中 地区

南種子町の
インギー鶏
県指定文化財 P31
鰐口
（下中八幡神社）
県指定文化財 P29
一陣長崎鼻貝塚
遺跡
町選定文化財 P32
ドラメルタン号
漂着之碑
町選定文化財 P31
下中八幡神社
お田植祭
町指定文化財 P30

鰐口（わにぐち）

分類：有形文化財（考古資料）

県指定文化財：昭和 **42** 年 **3** 月 **31** 日指定

鰐口は、社殿・仏堂前の軒下につるされる礼拝用の楽器の一種で、参拝のとき、前につるしてある布で編んだ綱を振り動かして鳴らすものです。周縁の上方２ヵ所に半円形の吊手、下方に切込み（口）がついており、この口を鰐の口に見立て鰐口の名がついたといわれています。下中八幡神社にある鰐口は、直径 30㎝、厚さ 8㎝、重さ 7.4kg の青銅製で、県内でも最大級の大きさです。

この鰐口は、応永 33 年（1426）３月吉日に長谷部徳永が奉納したものです。徳永氏の祖先は鎌倉から下島し、その子孫・徳永祐丕 (すけひろ) は西之村地頭として徳丸ヶ野に住み、塩屋の取り締まりなどをしていました。そのおり、八幡神社の社殿が壊れていたので、新しく立て直し事業の繁栄と海上の安全を祈願して鰐口を奉納しました。

刻まれている銘文は中央上部に「奉 (ほう) 掛 (かい)」、下方に「敬白」、外周に「正八幡宮之寶前　夫以金鐘有聲不扣豈鳴　時應永卅三丙午三月大吉日　願主長谷部徳永」、内周に「一心皈依渇仰三所和光證明求而無不合　願而無不成伏希旦那万福　祝」とあります。

鰐　口

しもなかはちまんじんじゃ　たうえまつり

下中八幡神社お田植祭

分類：無形民俗文化財

町指定文化財：昭和 47 年 3 月 30 日指定

茎永の宝満神社のお田植え祭りと並んで、下中八幡神社でも毎年３月にお田植祭が行われています。種子島でお田植祭が伝承されているのは、この２ヶ所だけです。

祭は、まず社人による夜明け前のシュエイ（潮井：海砂をタマシダや竹の笹で包んだもので、魔よけや神域を清めるために使う）取りから始まります。その後、神社で神事が行われ、お田植となります。お田植は、神社の南方に広がる田の中にある古墳のような形をした森山に隣接する御神田（オセマチ）で行われます。お田植の前には、ガマオイジョウ姿（老人が神の化身「ガマガエル」となった姿）の社人が歌う田植え歌に合わせ、社人オイジョウがお田植舞を奉納します。お田植は、昔は最初男だけで植え、その後男女で植えるのがしきたりであったといわれていますが、現在は男だけで行われています。そしてお田植が終わると、参加者全員が森山の端の平らな場所に集まり、直会（ナオライ）が行われ、めでた節が歌われます。

この付近の字に市ノ坪という地名があることから、条里制の施行が推察され、また周辺に弥生時代の遺跡が広がることから、この地は古くから稲作と深い関わりがあったことがうかがえます。

森山と御神田（オセマチ）

南種子町のインギー鶏（みなみたねちょうのインギーどり）

分類：天然記念物

県指定文化財：平成 **25** 年 **4** 月 **19** 日指定

明治 27 年 4 月 25 日午後 11 時頃、塩焚き小屋にいた羽生嘉助氏は真っ暗な沖の方から探照灯を照らし、花火を打ち上げて来る異様な大船を発見しました。驚いた羽生氏は、急いで真所集落に帰り、ホラ貝を吹いて集落民に知らせました。それから打ち寄せられてきた船を調べさせましたが、言葉が通じなかったので、村長に使いを出すとともに、茎南小学校の伊地知茂七先生を呼んで、この船のことを筆談で調べてもらいました。その結果、全長約 95m、幅約 11m、4 本柱で 3 段張りの大きな帆船は、イギリスのドラメルタン号という船であることがわかりました。

船は上海から香港へ行く途中で暴風雨に遭い、前之浜に漂着したのです。船底がかなり破損しており、その修理のため西之表を経由して、長崎の造船所に向かうことになりました。その間（8 月 16 日までの約 4 ヶ月間）、乗組員 29 名は真所集落にとどまり、厚いもてなしを受けたといいます。そして、そのお礼としてもらい受けたのが、船内に食糧用として飼っていた 11 羽の鶏、インギー鶏です。名前は、当時イギリス人のことをインギーと呼んでいたことに由来します。原産地は中国南部で、現在は種子島だけに原種が残る珍しい鶏です。

ドラメルタン号碑溶着之碑は、言葉や風習の違いを越えて交流した人々の心温まる物語を、永く永世に伝えるために建立されました。

ドラメルタン号漂着之碑（昭和 47 年 6 月建立）

インギー鶏

いちじんながさきばなかいづかいせき

一陣長崎鼻貝塚遺跡

分類：史跡
町選定文化財

中之下字一陣の太平洋に面した砂丘上にあります。昭和29年1月19日、川添憲枝氏が土器片・獣骨片・鯨の椎骨などを発見したことにより、昭和31年8月、広田遺跡を発掘した盛園尚孝氏が中心となり、南種子高校生であった崎田宏、立石公、向井晃、岩坪澄人、野沢慎一、谷口隆利氏らが参加し、本格的な発掘調査が行われました。また、発掘の最終段階では、三友国五郎先生も調査に参加されています。

発掘調査の結果、この貝塚は縄文時代晩期（黒川式）の遺跡であることがわかりました。

出土品は、石斧・鹿や猪の歯・鯨の椎骨・海亀の上下顎骨・魚骨・土器等で、貝層に多くの貝類・獣骨・魚骨を含んでいて、ジュゴン製のかんざしも出土しています。また、この貝塚から出土した老人に近い男性の人骨に、風習的な抜歯の跡や人為的な水平研歯が施されていて、南島における縄文時代の抜歯風習を考える上で貴重な資料といえます。

平成21年には、南種子町教育委員会によって発掘調査がなされ、現地に遺跡が今も残っていることがわかりました。また、広田遺跡の人骨が身につけていたものと同じ貝輪（オオツタノハ貝輪）が出土しました。一陣長崎鼻貝塚遺跡は、広田遺跡より1,000年以上古い遺跡ですので、この貝輪は、種子島における最古の貝製装身具といえます。

昭和31年の発掘風景

平成21年の調査で出土した土器、獣骨

タカクマムラサキ

Callicarpa longissima

絶滅危惧 IA 類（Critically Endangered）

クマツヅラ科のタカクマムラサキは、日本のレッドデータブックで、絶滅危惧 IA 類という最も絶滅のおそれの高いカテゴリーに登録されている大変稀少な植物です。日本では種子島の下中地区だけに野生の自生地があります。

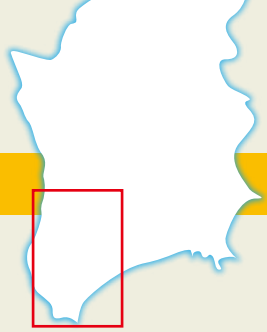
タカクマムラサキは、陽樹（日光が充分に当たらないと生育できない樹）で、下中の自生地では、周辺に木やカズラが生い茂り日陰となっていて、タカクマムラサキが枯れてしまうおそれがありました。

そこで、種子島自然観察同好会の方が中心となって、薬草試験場の協力をいただき、タカクマムラサキの自生地保護のための間伐と個体数の調査などが行われています。

平成 20 年の調査では、12 本のタカクマムラサキの自生が確認されています。

日本のタカクマムラサキは、種子島以外では絶滅していて、種子島の豊かな自然の象徴ともいえるものです。

タカクマムラサキの花



西之 地区

砂坂孫左衛門の碑及び業績
町指定文化財 P42

田代化石
町指定文化財 P43

西之本国寺盆踊
国選択文化財 P35-36

遠矢射碑
町指定文化財 P41

遠矢落碑
町指定文化財 P41

銭亀遺跡出土品
県指定文化財 P37

浜の山の石塚
町選定文化財 P44

砂糖製造師「前窪」氏の墓
町選定文化財 P45

門倉・前之浜自然公園
町指定文化財 P38-40

西之本国寺盆踊（にしのほんごくじぼんおどり）

分類：民俗芸能

国選択文化財：平成 **30** 年 **3** 月 **9** 日指定

毎年 8 月 16 日、西之地区の人々は本国寺に参詣し、境内で精霊様（先祖の魂）を供養する盆踊を踊ります。西之では踊りの組み分けをする際に、地区内の集落を東（田代、本村・崎原、平野、野大野・上瀬田）と西（野尻・木原、小田・前之原、下西目、砂坂・官造牧）の大きく二つに分けていますが、盆踊は東の組と西の組が一年交代で行い、各組から二つの踊りが披露されますので、各集落は 4 年に一度踊ることになります。

踊りは、大きく分けて「つんたん拍子」、「たけなが」、「きのぎの」がありますが、各集落で内容は異なります。ほとんどの踊りは、まず、大太鼓、小太鼓、鉦、笛など楽拍子（六拍子）とよばれる楽器の演者を先頭にして入場し、踊り手がつづきます。踊り手は一重の円を組み踊りますが、楽拍子は主に円の中央で踊ります。また、踊り手はカンモクとよばれる仮面をつけ祖先の霊となり踊るのです。

平成 28 年には、第 65 回全国民俗芸能大会に文化庁より推薦され、野尻・木原自治公民館の「たけなが」が出演し、大喝采を浴びました。

日本本土の盆踊りが大変賑やかなものが多いのに対し、この本国寺の盆踊は先祖供養という盆踊本来の意義がそのまま残っていて、しずかでゆかしい古風な踊りとして、日本の古い盆踊の姿を今に伝える貴重な文化遺産であると高く評価されていて、国の無形民俗文化財に選択されています。

第 65 回 全国民俗芸能大会

本国寺の境内で踊られる

盆踊の踊り手

盆踊の装束

銭亀遺跡出土品（ぜにがめいせきしゅつどひん）

分類：歴史資料（考古資料）
県指定文化財：平成 **27** 年 **4** 月 **17** 日指定

銭亀遺跡は、種子島の南端の門倉岬に程近い標高約 85 メートルの台地上に位置します。遺跡の北西部には、やや大きな谷があり、かつては湧水があったといいます。

この遺跡では、約 7,300 年前の鬼界カルデラ由来の火山灰や火砕流堆積物の下に縄文時代早期の遺構や遺物が見つかり、更にその下から旧石器時代の細石刃核や細石刃が出土しました。この発見によって、銭亀遺跡が日本で最も南に位置する細石器文化の遺跡となりました。さらに、発掘された接合資料により、円礫を分割し、割り取った素材から船野型細石刃核を製作する基本的工程が復元でき、他地域との技術の比較も可能となっています。

銭亀遺跡出土細石核接合資料

発掘風景

かどくら　まえのはましぜんこうえん

門倉・前之浜自然公園

分類：名勝

町指定文化財：昭和 47 年 3 月 30 日指定

種子島の最南端門倉岬から北に湾曲して、東に竹崎の宇宙センターへと続く海岸一帯が門倉・前之浜自然公園です。西は屋久島を一望でき、紺碧の海に浮かぶ数々の瀬と小島によってつくられる風景は美しく、海と白砂と木々と水田地帯がおりなす四季折々の色彩も豊かで、別名「七色の海岸」ともいわれています。

また門倉岬沖には黒潮が流れ、この一帯には古代よりさまざまなものが流れ着きました。特に、1543 年に異国船が漂着し、日本で初めて鉄砲が伝えられたことは有名です。さらに前之浜には縄文時代の遺跡もあり、歴史ロマンと素晴らしい景観の両者を満喫できる場所となっています。

門倉岬から前之浜を望んだ風景

てっぽうでんらいきこうひ
鉄砲伝来紀功碑

分類：有形文化財
町選定文化財

天文 12 年（1543）8 月 25 日、本村前之浜に異国船が漂着し、乗っていたポルトガル人から鉄砲が伝えられました。 また、この出来事は、ヨーロッパ人が日本に初めて上陸し、西洋の文化と日本の文化が初めて接触した出来事でもありました。

この日本の歴史に大きな影響を与えた記念すべき事実を後世に伝えるため、西之青年会が中心になり、地区民の協力を得て、大正 10 年 1 月、門倉岬に鉄砲伝来紀功碑を建立しました。

碑の題字は種子島守時の書、裏面の碑文は文学博士西村時彦（天囚）、書は日高實芳です。碑文には、鉄砲伝来の由来を記し、末尾に門倉岬からの眺め、鉄砲伝来の功績及び天囚の西之についての思い出を記しています。そして、最後は西之地区民に対する感謝の意を表し、「百世の下、斯の貞石を視よ」と結んでいます。

鉄砲伝来紀功碑

また、昭和９年12月15日には、本村の瀬の浦（門倉岬の東北約200ｍ）の丘の上に「鉄砲伝来・葡国人上陸之地」の碑も建立されました。表面の題字は種子島時望の書、碑文は当時の熊毛支庁長の徳田富実の選、書は西村織部之丞の子孫の西村時教です。

鉄砲伝来はわが国に技術革新をもたらし、産業振興に貢献しました。それだけでなく、鉄砲という新兵器の登場で、戦国時代に終止符が打たれ、平和を招来する原動力となりました。

中世から近世に歴史が大きく転換する契機となったこの鉄砲伝来は、西之村の地頭西村織部之丞が、乗船していた明国人の五峯と砂上で筆談し、その重要性を認め、早馬で赤尾木城に急報したことに端を発するのです。

鉄砲伝来葡国人上陸之地の碑

遠矢碑（とおやひ）

分類：有形文化財（歴史資料）

町指定文化財：平成 20 年 4 月 28 日指定

西之本村自治公民館前に遠矢落碑が、長田（鳴子坂下の土手）に遠矢射碑があります。遠矢とは、どれだけ遠くまで矢を放てるかを競うもので、太平の世における武術錬成用の競技でした。遠矢碑は、弓の名手だった西村時員（西之村の地頭西村時苗の次男）が、強弓さを人々に示すために建てたといわれており、当時の競技の様子とともに当時の生活の雰囲気を今に伝える貴重な資料です。

碑文によれば宝永３年（1706）の正月吉日に、遠矢射碑の辺りから矢を放ちました。その矢が落ちた場所が遠矢落碑の場所で、その距離は４町３段３間１尺５寸（約500ｍ）でした。検見武士（遠矢を確認する武士）は、遠藤家統・西村時次・遠藤家欽・上妻隆居で、竿取（距離を測る者）は日高実直・岩坪武継で、指南を向田氏宗次がつとめたことなどが記されています。

口碑によれば、この時の遠矢は、まず亀の甲（本村－田代間の山の山頂）から一番矢を放ち、それが遠矢射碑のある長田に落ち、二番矢は長田から放ち、遠矢落碑のある中之崎に落ち、三番矢は中之崎から放ち、高筒に落ちたそうです。矢の距離はいずれも４町３段３間１尺５寸だったそうで、矢の落ちたそれぞれの地点に碑が建てられましたが、三番目の高筒には碑が現存していません。また、別の口碑によれば、一番矢を矢鉾の峰から放ち、落ちた所がジュルシで、ここに小さな石がありました。そこから二番矢を放ったところ、亀の甲に落ちました。以下、三番矢が長田、四番矢が中之崎、五番矢が高土（たかとう）であったといいます。

遠矢落碑

遠矢射碑

砂坂孫左衛門の碑及び業績

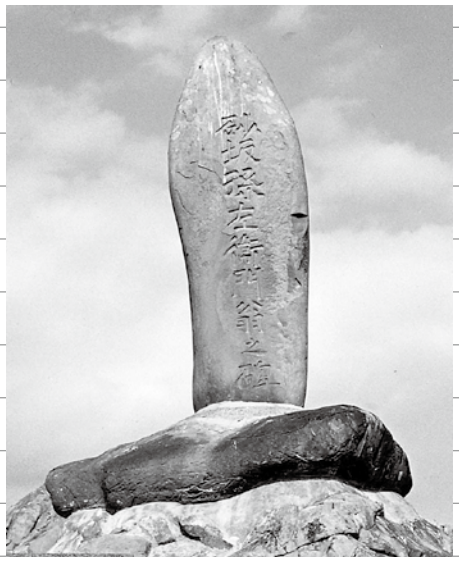
すなさかまござえもん　ぎょうせき

分類：天然記念物（史跡）
町指定文化財：昭和 **55** 年 **4** 月 **9** 日指定

砂坂孫左衛門の碑は、官造牧から西の海岸に降りた高瀬原にあります。この高瀬原付近は断崖絶壁で通路がなく、干潮時は危険な磯つたいを、満潮時は山手の急な道を3倍近くも遠回りして通るという大変不便なところでした。この難所に独力で道を開通させたのが砂坂孫左衛門です。碑は、その業績をたたえ後世へ伝えていくために、昭和2年西之青年会により建立されました。

孫左衛門は文政9年（1826）砂坂に生まれました。温厚かつ親切で意志の強い仕事熱心な人だったそうです。生家は裕福でしたが、子供に縁が薄く、何人もの子供を失い、残った娘も病気にかかってしまいました。孫左衛門は平癒を神仏に願い、人々のために高瀬原に道を作ることを決心しました。時に明治4年45歳の時でした。孫左衛門は、家業の合間を見て道路づくりに励みました。

その道路づくりは、大きな岩石の上で火を焚き、海水をかけて急激に冷やし、岩をもろくして砕くといった大変な労力が必要な方法でした。作業中、願いかなわず娘は世を去ってしまいましたが、孫左衛門は道路づくりを続けました。その強い熱意に感動した集落の人々もいつしか孫左衛門に協力するようになり、ついに明治10年8月、12町（1,300 m）余りの道が完成しました。この功績に対し、明治23年県知事から表彰をうけ、さらに戸長から田地4畝（4アール）を贈られました。孫左衛門は、大正元年87歳でこの世を去っていますが、その不撓不屈と奉仕の精神は今なおこの地に生き続けています。



砂坂孫左衛門翁之碑

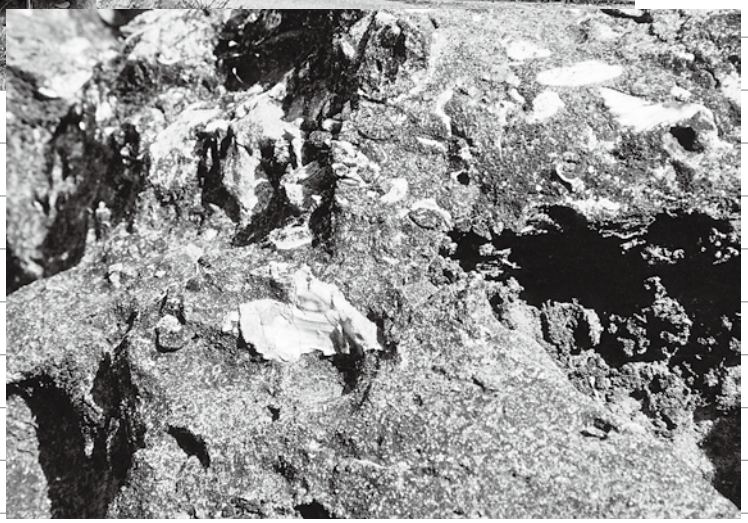
砂坂孫左衛門之墓

たしろかせき
田代化石

分類：天然記念物（地質・鉱物）
町指定文化財：昭和 **56** 年 **4** 月 **11** 日指定

田代集落から本村に向かって約 100 mのところにあります。化石を含む岩石は、約 500 万年前（新第三紀鮮新世）に、浅い海で堆積したと考えられる増田層（種子島の基盤を形成している地層のひとつ）の中にある団塊状石灰岩で、カキなどの二枚貝、巻貝などの化石を多量に含んでいます。石は非常に硬く、これは化石ができる時に貝の中のカルシウム分が溶け出してまわりの砂を固めたからです。

貝の化石は、平山や茎永、島間でも発見されていますが、田代化石のように何種類もの貝が一緒になって、しかも転石（ノジュール）のように出てくるのは珍しく、町内では河内の化石群で、ほかには中種子町納官平鍋でみられます。こうした化石を詳しく調べていくことによって、500 万年前の南種子には、どのような生物がいて、どんな自然環境であったのかを知ることができるのです。



田代化石

浜の山の石塚（はまやまいしづか）

分類：史跡
町選定文化財

本村の浜の山近くにあります。石を円形状に積み重ねた真ん中に自然石の石塔が建てられており、集落の人々はここを浜ん山の祭場と呼んでいます。毎年１月５日頃、その年の無事を祈ってシュエイ（潮井）を取り、祭が行われていたそうですが、現在は行われていません。

現在の浜の山の祭は、旧暦２月19日に御崎神社・千人熊・田の神・イゼ祭と合わせた潮祭のひとつとして行われています。潮祭は潮風災害よけとしての浜の山とそれを守ってきた祖先に感謝し、豊作を祈願する祭です。

まず御崎神社で神事を執り行った後、神社下の海岸で禊をし、20㎝くらいの丸石を拾い、浜の脇にある千人熊（遭難船の漂着者を祀っているといわれる）をお参りします。そして浜の山の石塚をお参りし、海岸で拾ってきた丸石を石塚の周りにお供えします。次に夏田園にある田開きの神、鹿鳴川にある一番イゼ（井関）と二番イゼの中ほどにある水神にお参りします。最後に直会をし、種蒔きの日取りなどを決めて祭は終わります。

浜の山一帯の防風林は、日欽あるいは六助という人が作り始めたと伝えられており、石塚に建てられている石塔は、その人の墓であるともいわれています。

浜の山の石塚がある防風林

浜の山の石塚

砂糖製造師「前窪」氏の墓

さとうせいぞうし　まえくぼ　し　はか

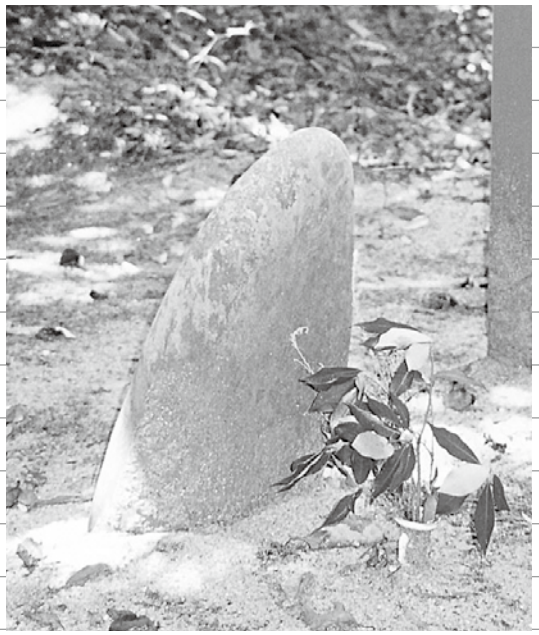
分類：有形文化財

町選定文化財

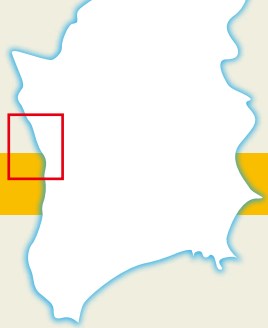
本村浜の山の墓地（大前）にあります。前窪氏は、文政 10 年（1827）、松寿院が島主と藩主の許可を得て、種子島で初めて砂糖の製造を始めるにあたり、徳之島から製糖技師として招いた人です。その功績は高く認められ、種子島家譜に「米 1 石を西之村本因寺の番僧に与ふ。砂糖製師範徳之島の前窪、西之村に於いて病死す。其の喪祭石碑等の費用を償はんが為なり」「米 2 斗を西之村の土民孫兵衛の後室に与ふ。砂糖製師範徳之島の前窪、病んで床に臥してより死に至るまで、常に側に在りて篤 (とく) 誼 (ぎ) を尽すを以てなり」等の記述があります。

前窪氏が導入した前窪式甘蔗 (かんしょ) 圧搾機 (あっさくき) は樫木で作った木車で、牛に引かせて廻したので牛車ともいいました。朝、寅の刻（午前 6 時）から酉の刻（午後 6 時）までかかって搾り、汁 1 石 5 斗（約 270 ℓ）を 5 つの鍋で煮詰めて作りました。砂糖は、椎の木製の樽に 120 斤（約 72kg）詰めとして島主の倉庫に全部収納し、それから鹿児島経由で大阪へ送られました。島民の使用は一切禁止され、これに反すると厳罰に処され、協力すると表彰されたといいます。

前窪氏は徳之島には帰らず、天保 2 年（1831）1 月に西之村で病死しました。



砂糖製造師前窪氏の墓



西海 地区

枕状溶岩

町指定文化財	P47

種子島製塩初地（下立石塩釜神社）

町指定文化財	P48

まくらじょうようがん
枕状溶岩

分類：天然記念物（地質・鉱物）
町指定文化財：昭和 **56** 年 **1** 月 **1** 日指定

大川小学校から西之に行く途中、上立石海岸の波打ちぎわ約 10 m四方の狭い範囲に見られます。直径 50 ～ 80㎝の楕円体に近い丸みを帯びた塊が集まってできた溶岩です。枕状溶岩（俵状溶岩ともいう）は熊毛層群（種子島の基盤岩層で約 7000 万年～ 2600 万年前）の中に見られ、表面はパン皮状の暗紫色～黒色のち密な岩石で、縦横に石英脈が入っています。

溶岩が深海底で噴出し、表面だけが冷やされて固まることを繰り返してできたもので、枕（俵）を積み重ねたような形をしていることから、こうした呼び名がついたといわれています。

枕状溶岩

たねがしませいえんしょち
種子島製塩初地

分類：史跡
町指定文化財：平成 3 年 5 月 1 日指定

立石は、種子島家譜に「始めて塩釜を建つ　第一は西ノ村の立石　第二は国上村の湊　或いは云う　第一大崎　尼泊　第二　久志瀬戸　竹之川なりと」という記述があることから、製塩業はじまりの地の一つとされています。

記念碑は塩釜神社境内にありましたが、現在の神社は道路改良工事にともない、上方に移転されています。

また大正 2 年 5 月に書かれた塩釜伝には、建仁元年（1201）、信基（種子島氏元祖）が島内を視察中、西之村立石が製塩業に適していると考え、塩焚きの技能を持つ臣下二人を派遣して、集落民に塩焚きの技術を教えさせたとあります。さらに 6 代島主時充の時、製塩法や年貢法を定めるとともに、塩戸（塩焚きに携わる人）の祖先の遺業をたたえ、塩焚きの集落には薪用の山林、駄馬飼育用の牧場を与え、その年貢は塩で納めさせたとあります。

この時の製塩法は鎌倉式製塩といわれ、竹の網代 (あじろ) に石灰や苦塩 (にがしお) を塗って 60 日間位乾かしたものを鍋として使い、大きな塩焚きかまどの上にのせて海水を入れ、一昼夜煮つめて作る方法でした。塩は 2 石 5 斗（450 ℓ）くらいできたといわれています。

神社には、信基が鎌倉から持ってきたといわれるカメが代々伝わっていて、これは苦塩を貯蔵するものだとされています。

また、1 月 15 日には火入れ祈祷を行っていますが、これは塩焚きかまどに火入れを行うとき、不浄を避けるために行われた厳粛な焚き初めの儀式の名残をとどめているものと考えられています。

種子島製塩初地の碑

西海地域の浜エビス

海岸の小高い瀬の上に、自然石を積みあげ祀る西海地域の浜エビス信仰は、古くからのエビス信仰をそのまま残す、日本列島最南端の浜エビスとして、学術的に大変貴重なものです。

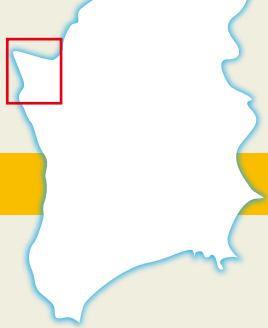
祀られる石は、浦の係のベンザシが若者を一人選び、目隠しをして海に潜り拾わせたものです。

海の中で魚と一緒にいた石は、魚を招き寄せる力があると信じられていますので、人々はエビス様に豊漁を祈るのです。

この浜エビスは、中世の終わりごろには、今とおなじような形で祀られていたと考えられていて、西海の浜辺では、数百年もの間変わらずに、素朴なエビスが、岩肌に祀られてきたとされています。

夕暮れどき、雄大な屋久島を背景に、西海の岩礁にたたずむ浜エビスは、この島の伝統文化と自然が融合したもっとも美しい文化的景観のひとつといえます。

大川の浜エビス



島間 地区

貫門
町指定文化財 P55

島間港・「伊能忠敬」種子島測量上陸の地
町選定文化財 P58

上妻城址
町指定文化財 P52-53

大塚山のヤッコ草及び石塔
町指定文化財 P56-57

火合峯
町指定文化財 P54

横峯遺跡
県指定文化財 P51

横峯遺跡（よこみねいせき）

分類：史跡

県指定文化財：平成 15 年 4 月 28 日指定

横峯遺跡は、種子島で初めて発見された旧石器時代の遺跡です。発掘調査によって旧石器時代・縄文時代草創期・縄文時代早期という３つの時期にわたって、人がこの地に住んでいた跡が見つかりました。

旧石器時代の層は、３層確認されました。特に種Ⅳ火山灰と呼ばれる約３万年前の火山灰の下にある層で見つかった礫群は、国内最古級の調理場跡の発見として大変注目を集めました。また、敲石や台石、磨石、礫器も見つかっています。

３万年前の遺跡は、全国的にも発見例が少ないのですが、種子島では、横峯遺跡の他にも局部磨製石斧が出土した中種子町立切遺跡や日本最古級の落とし穴遺構が見つかった大津保畑遺跡などがあって、内容も豊富です。

こうした種子島の旧石器遺跡群は、琉球列島の旧石器文化の成立やその性格・内容を研究するうえで、学術的に大変重要であることと考えられており、後世に守り伝えていくべき貴重な文化遺産といえます。

発掘調査風景

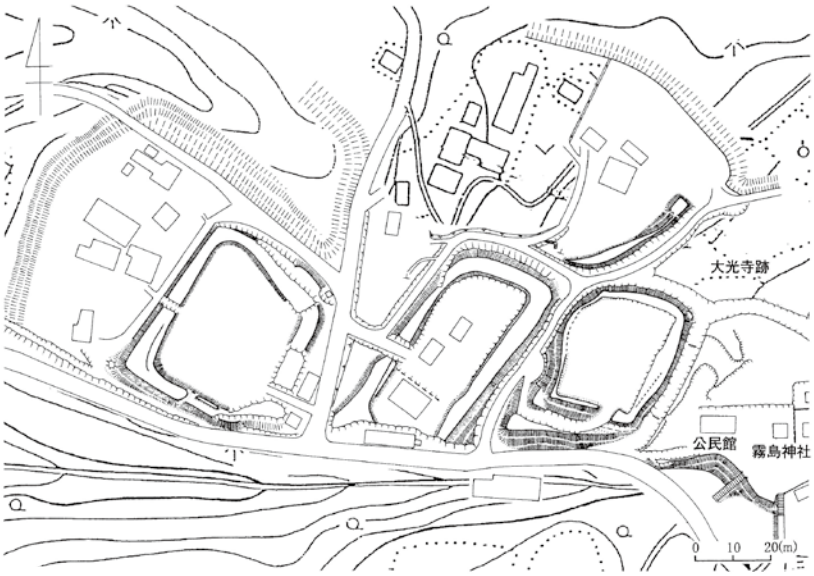
Ⅰ号礫群

こうづまじょうし
上妻城址

分類：史跡
町指定文化財：昭和 **56** 年 **1** 月 **1** 日指定

島間向方の島間小学校から豊受神社一帯の地形を利用し、標高約 75 ～ 110m に立地する山城です。現存するのは土塁（土塀）と堀切で、下城・内城・犬の馬場・殿川・仮屋・水上・おみ園などの地名が残っています。水上城・仮屋・内城の 3 つの曲輪（周囲に土や石の囲いを設けた平地）が東西に連なっていて、さらに外城・殿川・桜園など合わせて 6 つの曲輪群で構成された山城と考えられています。

上妻城に関する記録は残されていません。種子島家譜では肥後信基が北条時政から種子島・屋久島など南島 12 島を与えられた時、種子島の地頭は大浦口氏で代官が上妻氏であったとされています。言い伝えではその代官だった上妻氏の居城だといわれていますが、島内には上妻氏居城跡という場所がほかにもいくつかあります。また他に、その築城の始まりを奈良時代の多禰国府・国府津城（こうづじょう）とする説もあります。



上妻城址の縄張図（山本正昭氏作図）

中世以後も上妻城は島間の湊を治める拠点として、また種子島氏の滞在所の一つとして機能したと考えられます。

上妻城の特徴はその規模の大きさにあり、大隅諸島最大です。また、自然地形を利用し、堀切が深く、各曲輪の独立性が強い南九州地域に見られる中世城郭に類似しています。

堀　切

火合峯（ひやみね）

分類：名勝

町指定文化財：昭和 22 年 3 月 8 日指定

火合峯は、古代に種子島で 3 カ所だけノロシ台が設置された場所の一つとされています。

この頃全国的にノロシが設置されますが、それは、天智天皇の 663 年、白村江 (今の韓国の錦江付近) で、日本と百済の軍が唐と新羅の連合軍に大敗したことに起因します。以来日本は、当時大国であった唐と新羅の大軍が、いつ進攻して来るかという恐怖にさらされており、今の福岡で太宰府周辺の水城をはじめ、防御用に大陸式の山城を築き、そこに防人を配備するなどの対策を講じました。また瞬時にして百里を走るという、高速軍事通信ネットワークのノロシ (古名トブヒ＝ほう烽＝トビ・トミとも訛る) を、九州の島々から都にまではり巡らせました。

種子島は、東シナ海を挟み、唐（中国）と対面していて、当時の日本の最南端の島であったため (この後、大同 2 年（702）「多禰国」が創置される) ノロシが配備されたのです。

屋久島宮之浦の火立峯・住吉岬の火立峯・花里の火立峯などと共に、南種子では、ここ島間の火合峯が古代のノロシ台跡とされています。

江戸時代になると、幕府は諸藩に命令して全国の絵図 (地図) をつくらせました。絵図は慶長、正保、元禄、それに天保の各時代に作られましたが、そのうちわれわれが目にすることのできる最も古いものは元禄絵図です。

それによると熊毛郡では、赤尾木・増田・島間・口永良部・宮之浦・永田・湯泊等が遠見番所と書き込まれていますので、元禄時代の番所の位置と数が確認できますが、それも時代が経つにつれ、その数は増えていきました。

沿海の村々に設けられたこれらの番屋は、かつての古代ノロシ跡が用いられる場合が多かったのですが、速馬も併用され、替え馬も準備されました。

このように種子島のノロシは、古代に使われたほか、蒙古襲来、鉄砲伝来、さらに江戸時代になると異国船来航の際に、実際に活躍したと思われます。

火合峯に再現されたノロシ台

貫門（ぬきもん）

分類：史跡

町指定文化財：昭和 47 年 3 月 30 日指定

貫門は２本の柱を立て、上方をくりぬき、貫を通した門です。この型の門は、島主の許可がなければ立てられないもので、稲子泊にある貫門は網切吉右衛門の戦功により許可され立てられたものです。

吉右衛門は稲子泊の漁家に生まれました。慶長２年（1597）豊臣秀吉の朝鮮出兵に際し、島津軍の水手（船員）として従軍し功績を立てました。

南種子村沿革史に「御沙汰書を害虫に侵され其実績を詳にすることは能はざれども口碑によれば、我が種子島に於いて作りたる木船に乗り朝鮮興善島に押しかけたとき、敵、明軍は金網を張り防禦したが我が水手は能くそれを切り破り軍を進めたりぞ」との記述があります。

帰島後、その功績を後世に伝えるため、島主より代々、貫門を立てることを許可され、さらに網切の名と帯刀を許されることになったといわれています。茎永の小田家も許可されていますが、残念ながら現存していません。

貫　門

大塚山のヤッコ草及び石塔（おおつかやまのヤッコそうおよびせきとう）

分類：天然記念物、史跡
町指定文化財：昭和 **56** 年 **1** 月 **1** 日指定

■ヤッコ草

学名 Mitrastemon yamamotoi Mak. ヤッコ草科の一年生植物で、椎の木の根元に群生する高さ 7㎝ほどの寄生植物です。四国・九州・沖縄の限られた地域に見られる珍しい植物で、東市来町湯田のヤッコ草発生地は、国の天然記念物に指定されています。11 月頃に白い花をつけ、その形が奴（ヤッコ）の姿に似ていることからヤッコ草の名がついたといわれています。明治 13 年、田代安定氏によって大隅半島の田代郷で発見されたのが最初で、明治 41 年、植物学者牧野富太郎博士が高知県で発見し、正式に発表しました。種子島では、昭和 42 年頃発見され、全国でも有数の生息地となっています。

ヤッコ草

■大塚様の石塔

大塚山の中央に五輪の石塔が３基建立されています。口碑によると、応仁３年（1469）島主時氏が律宗を法華宗へ改宗したとき、島間の地頭大塚氏はそれに従わなかったため、竹のこぎりによる首切りの刑に処されました。その悲惨な最期をとげた大塚氏の御霊を供養するために石塔が建てられたとされています。８月 13 日に大塚山・大久留目屋敷で慰霊の祭が行われていましたが、現在は大久保自治公民館で行われています。

大塚様の石塔

慰霊祭の様子

しままこう　いのうただたか　たねがしまそくりょうじょうりく　ち
島間港・「伊能忠敬」種子島測量上陸の地

分類：有形文化財
町選定文化財

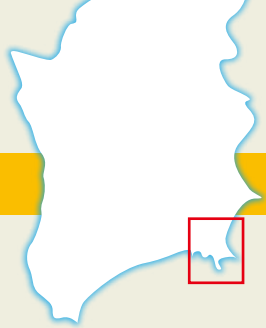
島間港は南種子町の海の玄関口として、またロケットの荷揚げ港として重要な役割を果たしています。港の歴史は古く、奈良時代から利用されていたと考えられています。江戸時代には、種子島氏に納める年貢米の倉庫が4棟ほど建っていたとされ、その米倉跡は倉跡（くらんしゅう）とよばれています。年貢米は平山村・茎永村・上里村・中之村・西之村・島間村・油久村・坂井村から馬で運ばれ米倉に納められました。その後、風を見計らって西之表の赤尾木城や鹿児島の種子島家の屋敷に船で運ばれていたようです。港の東側にあるクモリ山には赤尾木城から派遣されてきた武士たちが泊まる仮屋や弓の練習をする的射場もあったといいます。

また、島間港は伊能忠敬の種子島測量開始の地でもあります。文化9年（1812）4月28日、屋久島を経て島間に上陸、5月1日から南北二手に分かれ測量を開始しました。南隊は坂部定兵衛以下8名、島津家役人36名、種子島家役人27名、北隊は伊能忠敬以下8名、島津家役人59名、種子島家役人71名、総勢209名でした。測量には16日間を要したそうです。

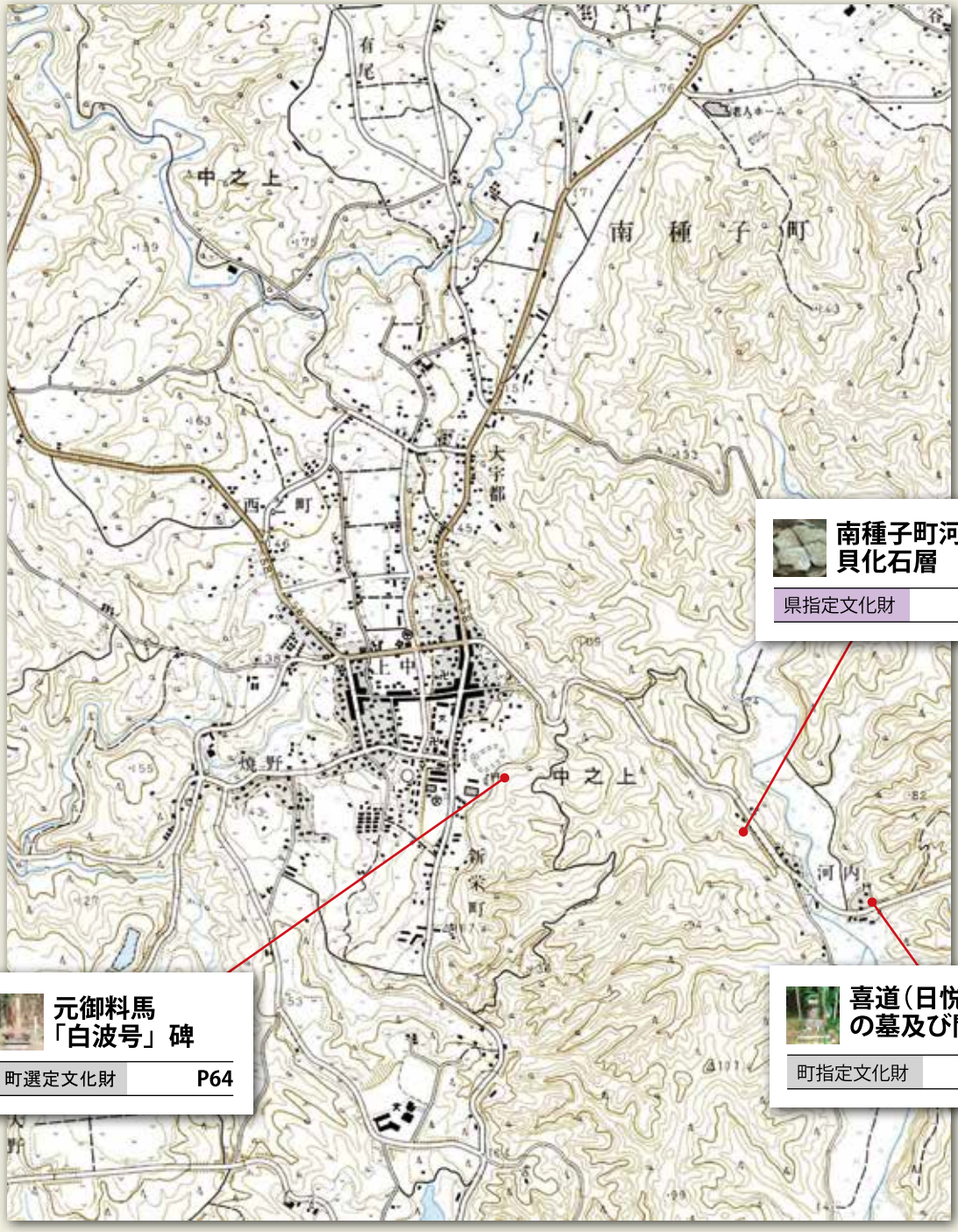
伊能忠敬種子島測量上陸の地の碑

南種子町の遺跡

下の図の○で囲んである地点は遺跡のある場所です。南種子町には、旧石器時代の遺跡 5、縄文時代の遺跡 48、弥生～古代の遺跡 14、中世～近世の遺跡 12 のあわせて 79 もの遺跡があります。



上中 地区



南種子町河内の貝化石層

県指定文化財 P61

元御料馬「白波号」碑

町選定文化財 P64

喜道（日悦上人）の墓及び関連品

町指定文化財 P62-63

南種子町河内の貝化石層（みなみたねちょうかわち　かいかせきそう）

分類：天然記念物（地質・鉱物）

県選択文化財：平成 **23** 年 **4** 月 **19** 日指定

約 1300 万年前、河内一帯は内湾で干潟が広がっていました。そこに生息していた生物が化石となったのが、この河内の化石群です。発見当時は、この地層が広範囲にわたり露出しており、化石群を露頭全体で見ることができました。

河内の化石群は、茎永層群河内層に含まれており、示準化石ヴィカリア（Vicarya callosa japonica Yabe and Hatai）が見つかっていますので、中新世中期の約 1300 万年前の海成層であることがわかりました。この時期の地層は、南九州では種子島の茎永層群でしか確認されていません。

河内の化石群には、泥干潟に「カキ礁」を形成した大量のマガキの化石と、潮間帯から潮下帯の砂底に住むゴカイ類の巣穴（生痕）化石が見つかっています。

このことから当時の海は、泥干潟であった時期、砂浜の浅海であった時期が繰り返されたことがわかりました。他にもサルボウ・ウミニナ・ハナガメ等の化石が見つかっています。

とくに陸に住むハナガメの化石は琉球列島形成前のもので、中新世中期以降の古地理（琉球列島形成史）と生物地理区の変遷を知るうえで極めて貴重な化石標本です。また、地球がダイナミックな構造運動を行っている証拠である断層も見つかっていて、種子島の成り立ちを研究するうえで、河内の化石群は極めて重要です。

調査風景

ハナガメの化石

喜道（日悦上人）の墓及び関連品

分類：有形文化財
町指定文化財：平成 **28** 年 **2** 月 **25** 日指定

喜道（日悦上人）の墓は河内神社境内にあります。日悦は 10 代島主幡時の弟で、出家して喜道と名のり、大会寺（西之表天神町の菅原神社附近にあった）の住職となりました。幡時の死後、後継者がいなかったため、喜道は幡時の子を連れてきて、11 代島主（時氏）としました。時氏は、日典と日良の勧めにより律宗を捨て、法華宗を信仰し、応仁 3 年（1496）、改宗の命を出しました。喜道は熱心な律宗信者であったため改宗に反対し、赤尾木を離れ河内に隠居し、加治谷峯に極楽寺を建てる間、河野家にしばらく身を寄せました。

極楽寺に移ると、喜道の徳を慕って村人たちが弟子入りを希望しましたが、律宗の僧侶としては自分が最後だと、全て断ったといいます。喜道は、余生を河内の人々のために尽くすことに努めました。村を豊かにするために、不毛の土地に水を引き、美田を 1 町 8 反（約 178a）も開墾しました。また、郡川両岸にはキンチク竹（ホウライチク）を植え、川の氾濫を防ぎ、更に孟宗竹も植え、それを利用した竹細工の指導も行いました。その場所は、今でも細工の宇都と呼ばれています。その後、島主からの圧迫が厳しくなったため、河内の人々に迷惑がかかることを恐れて、この地を去りました。

日悦上人の墓

去るにあたり、お世話になった河野家に立ち寄りましたが留守だったため、障子に「尋ぬともあとは白波荒磯の見る目もあらで何とあらそう」という辞世の句を書き残し、さらに法衣を置いて去りました。それは、延徳２年（1490）９月 11 日のことであったといいます。喜道は最後まで改宗しませんでしたが、島主の叔父であったことから「自悦坊日悦」という法華宗の僧名を贈られ、極楽寺境内に墓が建てられました。極楽寺は明治２年の廃仏毀釈で廃寺となり、その跡に日悦上人を祭神とする河内神社（現在の上中神社）が建てられました。

喜道が消息を絶った旧暦９月 11 日を命日とし、現在も祭が行われています。祭は前日の９月 10 日に信光寺の僧侶が経をあげ、つぎに神主が祝詞をあげます。翌朝、まず日悦の墓に、次の神社に向かって大踊りをします。逆の順序で踊ると、神社の横から大蛇が出てくると伝えられています。

喜道が残した法衣は河野長平氏宅に今でも大切に保管されていますが、辞世の句を書いた障子は戦争中に紛失したそうです。

大正 11 年１月上中青年会は、日悦上人の遺徳を顕彰し、石碑を上中神社境内に建立しました。

日悦上人の法衣

＊種子島家譜に見る日悦の記録

- 長享元年（1487）「・・・時氏、喜道・円林の改宗を欲して、之を両本山に請ひしなり」
- 長享２年６月 13 日 「・・・大会寺喜道憤を含んで見えず（時氏立つや喜道の力なり、而して喜道謂へらく『吾固より釈門の徒たり、宗旨を改め、日増を迎ふる、宣しく我に謀るべし、今や然らず、吾何ぞ見ん』）」
- 延徳２年９月 11 日「大会寺喜道、中之村河内に卒す、ついに宗旨を改めず強いて自悦坊日悦と諡し、改宗の祖と為す」

もとごりょうば　しらなみごう　ひ

元御料馬「白波号」碑

分類：史跡
町選定文化財

前之峯陸上競技場南側にある上野神社境内にあります。大正３年１月、馬産改良に尽力した上妻源一郎氏が、明治天皇から下賜された御料馬白波号について、後世に伝えるため記念碑を建立しました。

鹿児島県史によると、江戸時代の薩摩･大隅･日向の三州は、九州一の馬産地でした。それ以前も種子島においては、南北朝時代（1340 年代頃）に６代島主時充が塩屋牧のほか、直営牧場を安城・野間・島間・上中・西之・馬毛島などに設けてその保護繁殖を行ったとされています。

明治 18 年､県知事は種子島を優良馬の生産地に指定し､種馬千秋号を贈呈しました。さらに産馬組合の設置を命じこれを奨励したため、種子島の馬産改良は活気づきました。この改良に力を尽くしたのが上妻源一郎氏です。

このような上妻氏の功績が認められ、明治 25 年、宮内省より県庁を経て、天皇の御料馬白波号が上妻氏へ貸し付けられました。当時の県知事山内堤雲氏の働きかけによるものとされています。

白波号は、本県岩川村産で、県警部長が愛育していたものを大迫子爵が買い受け、東京に連れて行き、その後松方侯爵の所有となり、御料馬として献上されたものです。

上妻氏は恩典に報いるため、種馬用として大事にし、馬産改良に力を注ぎましたが、明治 28 年１月 20 日、白波号は惜しくも病死してしまいました。

その後も種子島では本土から種馬を購入し、改良に尽くしたので、種子島産の馬は好評だったといいます。

元御料馬白波号碑

あとがき

このたび、「南種子の文化財」を発行いたしました。この小冊子は、昭和５７年（１９８２年）３月、教育委員会と文化財保護審議委員の協力で、最初の発行を致しました。以来、５回にわたって一部の加筆・改訂を得て発行されており、直近の発行は平成２２年（２０１０年）３月であります。その後現在までの間に、国、県、町の指定になった文化財を加筆して、今回の発行となりました。

本町に人間が住み付いたのは、３万年前と言われております。現在私たちが目にしている遺跡、史跡、自然、年中行事などは、先人達の残した遺産であり、足跡であります。その足跡も、消滅し消えかかっているものも見受けられます。残せるものは残す努力をし、記録して後世に伝えることが、私たちの主体性の確立につながり、将来の指針になるものと思われます。今後も文化財の発掘に努力し、優れたものは町の指定しして、それぞれの手続きを踏みながら、県や国の指定になるように努力してまいりたいと考えています。

近年、文化財を活用した「町おこし」が話題になっております。町おこしに活かせる方策も大切なことであります。しかし、全ての文化財が活かせるものではありません。些少なものであっても、残すべきものは残していく努力を続けてまいります。

この小冊子によって、文化財の意義を再認識し、多少なりとも関心を持って頂ければ、それに勝る喜びはありません。

南種子町文化財保護審議会委員長　　長　田　忠　記

平成３０年３月

南種子町文化財保護審議会委員

柳田　和則　　日高　友典　　岩澤　昭文　　稗畠　悦朗

発行日　昭和５７年３月初版　平成１４年３月改訂
平成　元年３月改訂　平成２２年３月改訂
平成　５年３月改訂　平成３０年３月改訂
平成　９年３月改訂

発行　南種子町教育委員会・南種子町文化財保護審議会　〒891-3792　熊毛郡南種子町中之上 2793-1　TEL 0997-26-1111
印刷　㈲種子島新生社印刷

F I E L D N O T E

南種子町の
文化財

CULTURAL PROPERTY OF MINAMITANE

南種子町教育委員会
南種子町文化財保護審議会